報告

成人期前期と成人期中期にある2年課程（通信制）看護学生の生活状況における特徴の比較検討

松原　渉[1)]

A comparative study of the characteristics of the living conditions of two-year course (Correspondence course) nursing students in early adulthood and mid-adulthood

Wataru MATSUBARA[1)]

要旨

【目的】成人期前期と成人期中期にある2年課程（通信制）看護学生の生活状況における特徴を比較検討し学習支援の一助とする。

【方法】対象学生に無記名自己記入式質問紙調査を行う。年代別で成人期前期と成人期中期の2群に分け、学生生活状況では入学後の学習環境（10項目）、入学後の学習状況（7項目）、入学後の生活状況（10項目）についてそれぞれの平均値の比較を t 検定により実施する。

【結果】2群に $p < 0.05$ の有意差の認められた学生生活状況は入学後の学習環境5項目、入学後の学習状況1項目、入学後の生活状況1項目であった。

【結論】学生生活状況の特徴では2群の間でほとんど差がみられなかった。ただし、家族等の成員よりサポートを成人期前期は受けやすいが、成人期中期は受けにくいという点が示唆された。2年課程（通信制）看護学生では成人期前期と成人期中期にある生活状況の特徴を教員は理解し、学習支援の対応の一助とする必要がある。

キーワード：2年課程（通信制）、成人期前期、成人期中期、学生生活状況

Abstract

【Purpose】The characteristics of nursing students of two-year correspondence course compared between early adulthood and mid-adulthood, examined, and it is used to help with learning support.

【Method】The target student will be surveyed with an anonymous self-filling questionnaire. Divided into two groups, early adulthood and mid-adulthood , the student life situation is divided into t- test for the

1）神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程

learning environment after enrollment (10 items), the learning situation after admission (7 items), and the living situation after admission (10 items).

【Results】The student life situation in which the significant difference of $p < 0.05$ was recognized in the two groups was five items of the learning environment after admission, one item of the learning situation after admission, and one item of the life situation after admission.

【Conclusion】In the characteristics of the student life situation, there was almost no difference between the two groups. However, it was suggested that it was easy to receive support from members such as family members in early adulthood , but it was difficult to receive support in mid-adulthood. In the two-year correspondence course nursing students, teachers need to understand the characteristics of the living situation in early adulthood and mid-adulthood and help to support learning.

Key words: two-year course (correspondence course), early adulthood, mid-adulthood, Student Life Status

Ⅰ　はじめに

看護師学校養成所２年課程（通信制）は准看護師から看護師になるための教育機関の一つである。2年課程（通信制）看護学生（以下、Ｔ学生と略す）は年齢の幅が広く、成人期にある学生の役割責任に関わる活動状況や場は多様である。高宮ら[1]は、Ｔ学生が入学後の学習継続を困難にする因子は“「時間的・経済的制約および独習の苦しさ」「学習内容の難しさ」の２因子が示された”と述べている。制約とは広辞苑によれば“条件を課して自由に活動させないこと。物事の成立に必要な規定または条件”である[2]。Ｔ学生は就労や家事等の兼務の学生が多く、関係者と調整しながら、うまく履修すべき科目の単位を取得していく必要がある。Ｔ学生の特性の一つとして、金川ら[3]は、“学習する上で成人期にある学生の役割に関わる制約が多くそれによる不安を抱いている”ことを指摘している。入学前より明確な目的意識をもって就学している一方、成人期の役割責任に対して相当の負荷が予期でき、不安は当然の反応であると考える。中島ら[4]は、准看護師が２年課程（通信制）入学を希望しない理由について“「仕事との両立困難」「費用負担圧迫」「家事との両立不可」「健康上の問題」「家族の理解困難」「家族の健康上の問題」”を報告している。これらの先行研究から得られた要因より著者は、仕事や家事との両立の問題や家族の理解、家族の健康上の問題、費用負担関連は「入学後の学習環境」、学習内容の難しさや独習の苦しさ等に関しては「入学後の学習状況」、健康上の問題や時間的・経済的制約等は「入学後の生活状況」という、３側面の学生生活状況の枠組み作成を試みた。この３つの枠組みに基づいて、Ｔ学生の学生生活状況における特徴の比較検討するための質問項目をそれぞれ設定した。

一方、「成人期前期」と「成人期中期」について、千場[5]は“成人期前期は社会人としてさらに発達し、人生の坂を上っていく過程です。一般的には25歳から45歳ぐらいまでの期間をさします”と述べている。また、千場[6]は“成人期中期はだいたい45歳から65歳までの期間をいいます。成人期前期の上り坂にたいして、成人期中期は人生のピークを過ぎて坂を下る時期にあたります”と述べている。服部[7]は、エリクソンの発達段階Ⅶを２つの時期に分け、その各々を“成人中期（30～50歳）および成熟期（50～65歳）とよび、独立した人生周期とした。その理由は、中壮年は多彩な変化と非常に長い時間

を有する時期で、これを1つのまとまった発達段階ととらえるのは、どうしても無理があるからである。”と述べている。西出ら[8]は、入学前授業終了時調査をもとにT学生の入学前不安とその年代別特性を検討し、30歳代、40歳代、50歳代の不安の項目を比較して報告している。しかし、成人期にあるT学生に対して学生生活状況を年代別で検討している実態報告は少ない。著者[9]は、T学生について学習支援の一助となるよう、学習姿勢の積極群と非積極群において、入学後の生活状況の比較を調査し生活変化との関連を調査研究で報告しているが、年代別の検討はしていない。前回の調査研究で着眼していなかった年代別の学生生活状況の自覚を探究することは生涯学習の支援を検討するための貴重な資料になる。そこで、今回はT学生を対象とし20歳代後半から40歳代前半の成人期前期学生と40歳代後半から60歳代までの成人期中期学生に分けて、それぞれの学生生活状況における特徴について比較をし、明らかにし学習支援の対応の一助にすることを目的とする。

II　用語の操作的定義

本研究では用語を以下のように定義した。

「成人期前期」とは、属性で25歳以上44歳以下と回答したものと考え定義した。

「成人期中期」とは、属性で45歳以上60歳代と回答したものと考え定義した。

「入学後の学習環境」とは、仕事や家事との両立の問題や家族の理解、家族の健康上の問題、費用負担関連の質問10項目とした。

「入学後の学習状況」とは、学習内容の難しさや独習の苦しさ等の質問7項目とした。

「入学後の生活状況」とは、健康上の問題や時間的・経済的制約等の質問10項目とした。

「学生生活状況」とは、T学生の「入学後の学習環境」、「入学後の学習状況」、「入学後の生活状況」の3つの側面より質問項目を設定し、質問から得られた回答より、どのように自覚しているかを得点化し、検定した結果を「学生生活状況」として捉えたものとした。

III　研究方法

1　対 象 者：2年次で実習後3日間の対面授業を受講したT学生、128名

2　調査方法：無記名自己記入式質問紙調査

3　調査時期：2020年7月中旬～9月中旬

4　調査内容

・属性：年齢、性別、仕事の有無（3項目）

・「入学後の学習環境」に関する質問（10項目）

・「入学後の学習状況」に関する質問（7項目）

・「入学後の生活状況」に関する質問（10項目）

5　倫理的配慮

神戸常盤大学短期大学部の倫理委員会で承認（承認番号　神常短研倫第19－12号）を得て、質問紙調査を実施した。本調査の目的・方法・内容、参加の自由、個人の成績評価には不利益がないこと、得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、守秘義務などについて書面を使って口頭で説明し、同意を得た。

6　分析方法

1）対象者の年齢の質問で44歳以下と答えたものを成人期前期、45歳以上と答えたものを成人期中期として年齢層を分類した後、両群の「入学後の学習環境」、「入学後の学習状況」、「入学後の生活状況」の平均値の比較を t 検定により実施し、両群の有意差判定を行った。（$p < 0.05$）

2）各質問項目の回答の≪あてはまらない≫から≪あてはまる≫の4段階にそれぞれ1点から4点を配点し得点化し、回答の傾向と偏りの確認のために平均値と標準偏差を算出した。

Ⅳ　結果

1　成人期前期と成人期中期の２群選別プロセス

調査用紙の配布数は128部、回収数は123部であり、回収率は96％であった。123部を有効回答とした。対象者全体では最小年齢が30歳、最高年齢が67歳で、年齢平均は45.1 ± 6.64であり、40歳代が多い。20歳代後半から44歳以下と回答した成人期前期は55名（45％）である。45歳以上60歳代と回答した成人期中期は68名（55％）である。対象者では成人期中期がやや多いことが確認された。

2　対象者の属性

年齢では成人期前期は平均年齢が39.24 ± 3.46で、成人期中期は平均年齢が49.95 ± 4.29であった。性別では、成人期前期は女性51名（92.7％）、男性4名（7.3％）、成人期中期は女性62名（92.5％）、男性5名（7.5％）である。男女比ではどちらも女性が圧倒的に多い。仕事の有無では成人期前期が52名（94.5％）、成人期中期が62名（91.1％）と両群ともに殆どの学生が働きながら学んでいることが確認された。

3　「学生生活状況」における成人期前期と成人期中期の比較

成人期前期と成人期中期の２群間で、学生生活状況について「入学後の学習環境」「入学後の学習状況」「入学後の生活状況」に分けてそれぞれの比較を t 検定により実施した結果について以下、報告する。

（1）「入学後の学習環境」における成人期前期と成人期中期の比較

「入学後の学習環境」に関する質問項目は全部で10項目であった。「入学後の学習環境」の平均値の比較を t 検定により実施し、成人期前期と成人期中期の２群間で有意差判定を行った。表１に示す通り、10項目中５項目の平均値で有意差が認められ、残り５項目は認められなかった。

『職場に本学の学生であることを公表している』の平均値は成人期前期では3.88 ± 0.21であり、成人期中期の3.65 ± 0.59よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（118）＝1.91、p＝0.06〕。

『職場は私の学生生活に対して協力的である』の平均値は成人期前期では3.52 ± 0.48であり、成人期中期の3.24 ± 0.86よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（117）＝1.85、p＝0.06〕。

『家族は私の学生生活に対して協力的である』の平均値は成人期前期では3.66 ± 0.37であり、成人期中期の3.23 ± 0.86より、極めて有意に高いことを示す。

〔t（120）＝2.93、p＜0.00〕。

『職場では中堅的立場の役割だと思う』の平均値は成人期前期では3.24 ± 0.57であり、成人期中期の2.94 ± 0.87よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（118）＝1.92、p＝0.06〕。

『困ったときは相談にのってくれる人がいる』の平均値は成人期前期では3.63 ± 0.30であり、成人期中期の3.17 ± 0.89より、極めて有意に高いことを示す。

〔t（121）＝3.18、p＜0.00〕。

『困ったときは親が助けてくれる』の平均値は成人期前期では3.25 ± 1.00であり、成人期中期の2.53 ± 1.46より、極めて有意に高いことを示す。

〔t（120）＝3.51、p＜0.00〕。

『親の世話をする必要がある』の平均値は成人期前期では2.09 ± 1.38であり、成人期中期の2.67 ± 1.43より、極めて有意に低いことを示す。

〔t（120）＝-2.68、p＜0.00〕。

『子供の世話をする必要がある』の平均値は成人期前期では2.96 ± 1.85であり、成人期中期の2.61 ± 1.76よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝1.42、p＝0.15〕。

『経済的な工面が大変である』の平均値は成人期前期では2.76 ± 1.10であり、成人期中期の2.80 ± 1.17とほぼ同じであり、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝-0.23、p ＝ 0.81〕。

『職場の休みは比較的、調整ができると思う』の平均値は成人期前期では3.32 ± 0.68であり、成人期中期の2.98 ± 0.65より、有意に高いことを示す。

〔t（118）＝ 2.23、p ＜ 0.01〕。

（表1）

（2）「入学後の学習状況」における成人期前期と成人期中期の比較

成人期前期と成人期中期の2群間で比較した「入学後の学習状況」を表2に示す。「入学後の学習状況」の質問は全部で7項目であり、最初の3項目が「テキスト学習」、残りの4項目が「対面授業」に関する内容で構成されている。成人期前期と成人期中期の入学後の学習状況に関する平均値の差について統計学的に有意かどうかを確かめるために、有意水準5%で両側検定の t 検定を行い、1項目で有意差がみられる。

『レポートを書くのが楽しい』の平均値は成人期前期では1.84 ± 0.58であり、成人期中期の1 .94 ± 0.53よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝-0.77、p ＝ 0.43〕。

『レポート提出を通してのやりとりが楽しい』の平均値は成人期前期では2.25 ± 0.64であり、成人期中期の2.17 ± 0.65よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝ 0.53、p ＝ 0.59〕。

『テキスト学習を通して積極的に学習している』の平均値は、成人期前期では2.63 ± 0.56であり、成人期中期の2.47 ± 0.61よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝ 1.18、p ＝ 0.23〕。

『対面授業で学ぶことの予習をしている』の平均

表１　「入学後の学習環境」における成人期前期と成人期中期の比較

質問項目	対象学生	N	平均値	標準偏差	*df*	*t*値	*p*値
●職場に本学の学生であることを公表している	成人期前期／	53	3.88	0.21	118	1.91	0.06
	成人期中期	67	3.65	0.59			
●職場は私の学生生活に対して協力的である	成人期前期／	53	3.52	0.48	117	1.85	0.06
	成人期中期	66	3.24	0.86			
●家族は私の学生生活に対して協力的である	成人期前期／	54	3.66	0.37	120	2.93	0.00**
	成人期中期	68	3.23	0.86			
●職場では中堅的立場の役割だと思う	成人期前期／	53	3.24	0.57	118	1.92	0.06
	成人期中期	67	2.94	0.87			
●困ったときは相談にのってくれる人がいる	成人期前期／	55	3.63	0.30	121	3.18	0.00**
	成人期中期	68	3.17	0.89			
●困ったときは親が助けてくれる	成人期前期／	55	3.25	1.00	120	3.51	0.00**
	成人期中期	67	2.53	1.46			
●親の世話をする必要がある	成人期前期／	55	2.09	1.38	120	-2.68	0.00**
	成人期中期	67	2.67	1.43			
●子供の世話をする必要がある	成人期前期／	55	2.96	1.85	121	1.42	0.15
	成人期中期	68	2.61	1.76			
●経済的な工面が大変である	成人期前期／	55	2.76	1.10	121	-0.23	0.81
	成人期中期	68	2.80	1.17			
●職場の休みは比較的、調整ができると思う	成人期前期／	53	3.32	0.68	118	2.23	0.01*
	成人期中期	67	2.98	0.65			

* p ＜0.05、** p ＜0.01

値は、成人期前期では2.29 ± 0.58であり、成人期中期の2.44 ± 0.64よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（120）＝-1.09、p＝0.27〕。

『授業でわからないことがあると教員に質問している』の平均値は成人期前期では2.78 ± 0.65であり、成人期中期の2.43 ± 0.94より、有意に高いことを示す。

〔t（120）＝2.12、p＜0.03〕。

『授業で紹介された本や文献で関連することを調べている』の平均値は成人期前期では2.48 ± 0.51であり、成人期中期の2.70 ± 0.54よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（119）＝-1.64、p＝0.10〕。

『授業内容について学生の間で話をする』の平均値は成人期前期では3.29 ± 0.46であり、成人期中期の3.13 ± 0.74よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝1.10、p＝0.26〕。

（表2）

（3）「入学後の生活状況」における成人期前期と成人期中期の比較

成人期前期と成人期中期の2群間で比較した「入学後の生活状況」を表3に示す。「入学後の生活状況」の質問は全部で10項目であり、最初の6項目がポジティブな質問で、残りの4項目がネガティブな内容で構成されている。成人期前期と成人期中期の入学後の学習状況に関する平均値の差について統計学的に有意かどうかを確かめるために、有意水準5%で両側検定のt検定を行い、1項目で有意差がみられる。

『人間関係が広まった』の平均値は成人期前期では3.36 ± 0.45であり、成人期中期の3.04 ± 0.60より、有意に高いことを示す。

〔t（121）＝2.39、p＜0.02〕。

『仕事にやる気が出た』の平均値は成人期前期では2.83 ± 0.84であり、成人期中期の2.68 ± 0.61よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（120）＝0.97、p＝0.33〕。

『本や文献をよく読むようになった』の平均値は成人期前期では3.01 ± 0.79であり、成人期中期の3.23 ± 0.39より、やや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝-1.58、p＝0.11〕。

『本学で学ぶことで、考え方に変化があった』の平均値は成人期前期では3.55 ± 0.43であり、成人期

表２　「入学後の学習状況」における成人期前期と成人期中期の比較

質問項目	対象学生	N	平均値	標準偏差	*df*	*t*値	*p*値
●レポートを書くのが楽しい	成人期前期／	55	1.84	0.58	121	-0.77	0.43
	成人期中期	68	1.94	0.53			
●レポート提出を通してのやりとりが楽しい	成人期前期／	55	2.25	0.64	121	0.53	0.59
	成人期中期	68	2.17	0.65			
●テキスト学習を通して積極的に学習している	成人期前期／	55	2.63	0.56	121	1.18	0.23
	成人期中期	68	2.47	0.61			
●対面授業で学ぶことの予習をしている	成人期前期／	55	2.29	0.58	120	-1.09	0.27
	成人期中期	67	2.44	0.64			
●授業でわからないことがあると教員に質問している	成人期前期／	55	2.78	0.65	120	2.12	0.03*
	成人期中期	67	2.43	0.94			
●授業で紹介された文献で関連することを調べている	成人期前期／	54	2.48	0.51	119	-1.64	0.10
	成人期中期	67	2.70	0.54			
●授業内容について学生の間で話をする	成人期前期／	55	3.29	0.46	121	1.10	0.26
	成人期中期	68	3.13	0.74			

* p ＜0.05、** p ＜0.01

中期の3.54 ± 0.34とほぼ同じであり、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝0.01、p＝0.99〕。

『本学で学んだことを職場で活かせた』の平均値は成人期前期では3.20 ± 0.51であり、成人期中期の3.09 ± 0.59より、やや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（118）＝0.85、p＝0.39〕。

『本学で学んだことを職場の人に伝えた』の平均値は成人期前期では3.28 ± 0.55であり、成人期中期の3.02 ± 0.90よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（118）＝1.58、p＝0.11〕。

『時間的に忙しくなった』の平均値は成人期前期では3.74 ± 0.26であり、成人期中期の3.70 ± 0.30よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝0.40、p＝0.68〕。

『身体的にしんどくなった』の平均値は成人期前期では3.50 ± 0.47であり、成人期中期の3.47 ± 0.58よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（121）＝0.29、p＝0.77〕。

『仕事がしんどくなった』の平均値は、成人期前期では3.03 ± 0.88であり、成人期中期の3.16 ± 0.71よりやや低いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（118）＝-0.77、p＝0.44〕。

『経済的に苦しくなった』の平均値は、成人期前期では2.76 ± 0.99であり、成人期中期の2.73 ± 1.10よりやや高いが、両群の間には有意差がみられなかった。

〔t（120）＝0.17、p＝0.86〕。

（表3）

表３　「入学後の生活状況」における成人期前期と成人期中期の比較

表３　「入学後の生活状況」における成人期前期と成人期中期の比較

質問項目	対象学生	N	平均値	標準偏差	*df*	*t*値	*p*値
●人間関係が広まった	成人期前期／	55	3.36	0.45	121	2.39	0.02*
	成人期中期	68	3.04	0.60			
●仕事にやる気が出た	成人期前期／	55	2.83	0.84	120	0.97	0.33
	成人期中期	67	2.68	0.61			
●本や文献をよく読むようになった	成人期前期／	55	3.01	0.79	121	-1.58	0.11
	成人期中期	68	3.23	0.39			
●本学で学ぶことで、考え方に変化があった	成人期前期／	55	3.55	0.43	121	0.01	0.99
	成人期中期	68	3.54	0.34			
●本学で学んだことを職場で活かせた	成人期前期／	53	3.20	0.51	118	0.85	0.39
	成人期中期	67	3.09	0.59			
●本学で学んだことを職場の人に伝えた	成人期前期／	53	3.28	0.55	118	1.58	0.11
	成人期中期	67	3.02	0.90			
●時間的に忙しくなった	成人期前期／	55	3.74	0.26	121	0.40	0.68
	成人期中期	68	3.70	0.30			
●身体的にしんどくなった	成人期前期／	55	3.50	0.47	121	0.29	0.77
	成人期中期	68	3.47	0.58			
●仕事がしんどくなった	成人期前期／	53	3.03	0.88	118	-0.77	0.44
	成人期中期	67	3.16	0.71			
●経済的に苦しくなった	成人期前期／	55	2.76	0.99	120	0.17	0.86
	成人期中期	67	2.73	1.10			

* p ＜0.05、** p ＜0.01

Ⅴ　考察

成人期前期と成人期中期の学生生活状況の平均値の比較をしたところ、両群の間で関連が多いのは、学生を取り巻くサポート環境の項目であることが確認できた。

（表4）

1　「入学後の学習環境」における成人期前期と成人期中期の比較

「入学後の学習環境」では周囲からのサポート状況の項目であるが、成人期前期が成人期中期より平均値が高く有意差が確認された。これを座標軸で表すと図1の通り4つの領域に分けられる。成人期前期では（1）、成人期中期では（4）の領域が典型例であると考える。つまり前者は困った時の親からの助け等のサポートを期待できる立場であるが、後者は逆に親の世話が必要になる可能性が推測できる。前者が後者よりもサポートに依存できる背景として前者の親の年代は後者の親よりも相対的に若いことが、例えば育児の協力等でサポートが得られやすい理由として考えられる。一方､後者の親は対照的で、身体的にも精神的にも社会的にも機能低下が増強し、逆に自身が学生に依存せざるを得ない状況が待ち構えている。つまり、『困ったときは親が助けてくれる』『親の世話をする必要がある』の2項目の内容は時間的経過による変化で親子関係における役割期待交代であると考える。他方、『家族は私の学生生活に対して協力的である』の平均値で成人期中期が成人期前期より低い理由は、時間的経過の中で成人期中期の場合では老親の世話や子供の巣立ち等の状況変化が影響し、家族に依存できる余裕はなく、孤立しやすい状況になりやすい可能性が推測できる。

（図1）

『親の世話をする必要がある』の平均値そのものは他の項目に比べて低い数値であるが、看過できない。高林[10]は40代と50代の女性看護師が抱く仕事と介護の両立への不安と職場に求める支援を調査し、“両立の不安では｢自分の生活や健康への影響｣、｢休みづらい職場環境｣、｢制度や法律の知識不足｣、｢職場の支援制度の情報不足｣の4因子が抽出された”と述べている。山口[11]は、ジェネレーショナル・ケアの担い手としての成熟で、“仕事、子育て、老親の介護は、それぞれ独立したものではなく、相互に影響しあうものである。（中略）ケアは短時間にできるものではなく、愛情が必要であり、単なる他人の世話や介助ではなく、それ以上に自身の心の葛藤を克服する力が求められる”と述べている。親への世話の必要性に対して柔軟に対応する力、すな

表4　学生生活状況において有意差がみられた成人期前期と成人期中期の比較

	項　　目	成人期前期　　成人期中期	*p*
学習環境	○家族は私の学生生活に対して協力的である	3.66±0.37＞3.23±0.86	**
	○困ったときは相談にのってくれる人がいる	3.63±0.30＞3.17±0.89	**
	○職場の休みは比較的、調整ができると思う	3.32±0.68＞2.98±0.65	*
	○困ったときは親が助けてくれる	3.25±1.00＞2.53±1.46	**
	○親の世話をする必要がある	2.09±1.38＜2.67±1.43	**
学習状況	○授業でわからないことがあると教員に質問している	2.78±0.65＞2.43±0.94	*
生活状況	○人間関係が広まった	3.36±0.45＞3.04±0.60	*

＊p＜0.05、＊＊p＜0.01

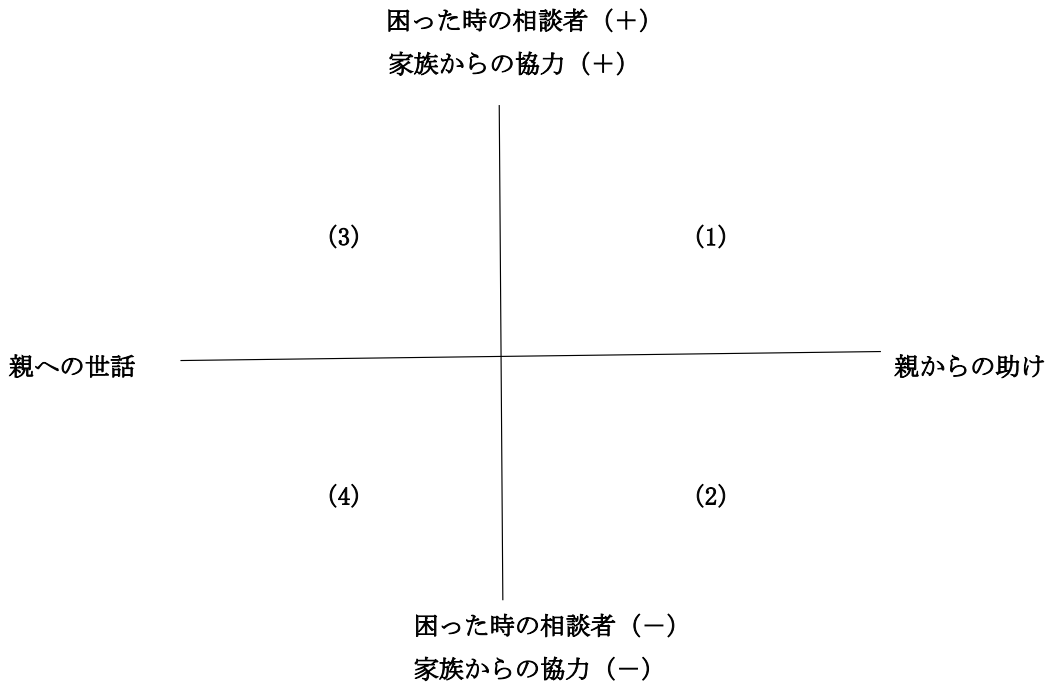

図１　成人期前期と成人期中期にある学生の親密な人からのサポート状況の分類

わち自身の心の葛藤を克服する力が問われているということだろう。しかし、成人期にある学生の制約に対して、成人期前期では親の存在が頼りになりサポートを依存できるが、成人期中期では一転して親の世話をしなければならない親子関係の変化の可能性があることは覚悟しておく必要があるだろう。干場[12]は、成人期中期では“ひとは、職場や家庭において自分が果たすべき役割がおおきく変化していることを理解すると共に、そうした周囲からの役割期待の変化にうまく対応していかなければなりません”と述べている。成人期中期にある学生は周囲からの役割期待変化にうまく適応していくことが求められている。しかし、T学生は年代に関わらず、子どもが有熱でも預かり可能な保育所や老親のショートスティなどの社会資源を情報収集し積極的な予期と備えが必要であると考える。

従って、サポート環境はT学生にとって重要な意味をもつと考える。稲葉[13]は“同一のストレッサーに直面した際に、ソーシャル・サポートに恵まれている人は、恵まれていない人に比してストレッサーの影響を受けることが少ない。つまりサポートがストレッサーの影響力を弱める＝緩衝する、という効果をさす”と述べている。成人期前期は家族等の成員よりサポートに恵まれているので、成人期中期よりもストレス緩衝では有利な傾向が考えられる。

『職場の休みは比較的、調整ができると思う』の平均値で成人期中期が成人期前期より低い。不規則な夜勤を含む交代制勤務では責任の重圧から疲労蓄積し、体力の回復は年齢が高くなるほどきついものがある。この項目で両群の間で有意差が確認できたのは、加齢とともに体力低下の自覚による不安が理由の一つと考える。先述した通り、T学生の入学前不安について調査した西出ら[14]は、“50歳代では他世代と比べて『仕事との両立』の不安が高いことが解った”と述べている。また、西出ら[15]は“50歳代はそれ以下の年代に比べて健康、体力に関わる不安をもっていることがわかる”と報告している。成人期中期は平均年齢49.95 ± 4.29歳であるが、女性にとって更年期を迎える時期と重なる。更年期に伴う閉経は健康への不安要因になるだろう。健康や体力に関わる不安は時間的経過による身体的能力低下の

自覚であり勤務調整の不安と連動している面が考えられる。

2　「入学後の学習状況」における成人期前期と成人期中期の比較

「入学後の学習状況」では、『授業でわからないことがあると教員に質問している』の平均値で、成人期前期は成人期中期よりも高く、有意差が確認された。西田[16]は“25～34歳では人格的成長の感覚が強いのに対して、55～65歳ではその感覚は弱くなる一方で、自律性の感覚が強まるというように、年代によって心理的well-beingの様相が異なり、次元によっては発達的に変化することが示唆された”と述べている。これらの発達的な変化による感覚の相違が両群の間で有意差が生じた理由に影響しているかもしれない。一方、下仲[17]は“たいていの人は中年期にかかるにつれて柔軟性がなくなり、自分なりのやり方や活動に固執し、新しい考え方を受け入れにくくなる。（中略）新しい課題に向かって精神的な努力をせずにこれまでの経験によって支配しようとしやすくなる”と述べている。確かに学生が年配者である場合は、柔軟性が低下して授業でわからないことを質問して新しい考え方を取り入れる努力よりも自分のこれまでの経験に固執してしまう傾向が懸念される。成人期中期の学生に対して、教員は注意深く配慮し気軽に質問や感想が表出できるような雰囲気づくりや見守る姿勢が必要ではないかと考える。

3　「入学後の生活状況」における成人期前期と成人期中期の比較

「入学後の生活状況」では『人間関係が広まった』の平均値で、成人期前期は成人期中期よりも高く、有意差が確認された。この背景にはT学生の場合、ほとんどが在宅での学習が中心であるため、学生同士でソーシャルネットワーキングサービス（以下、SNSと略す）を活用し仲間づくりに役立てている。そのため、SNSの利用率で人間関係の広がりを捉えている可能性が考えられる。総務省の令和2年通信利用動向調査[18]によると、年齢階層別SNSの利用状況は“20～29歳が87.1%、30～39歳が83%、40～49歳が78.4%、50～59歳が70.4%、60～69歳が51.7%”と報告している。年代が若いほどSNSの利用率が高いが、このことが『人間関係が広まった』の平均値で成人期前期は成人期中期よりも高いことと連動している面が考えられる。

しかし、「入学後の生活状況」で両群ともに平均値が最も高かったのは『時間的に忙しくなった』、続いて『本学で学ぶことで、考え方に変化があった』である。サポートに恵まれているはずの成人期前期のほうがやや平均値が高い。これにより時間不足感はサポートの有無とは無関係で、精いっぱいの生活を余儀なくされ時間と葛藤している状況を意味していると考える。一方、『本学で学ぶことで考え方に変化があった』はプラスの反応である。T学生の学生生活状況ではこのプラスとマイナスとの反応を同時に自覚していると考える。

4　総合的考察

成人期前期と成人期中期との間では学生を取り巻くサポート環境において差異がみられたことから、特徴が浮き彫りになったと考える。例えば成人期前期では育児等で、家族等の成員よりサポートが得られやすいが、成人期中期では介護等に対して家族等の成員よりサポートが得られにくい場合があるということである。したがって、成人期中期のT学生は深刻な状況が生じやすいことが懸念される。干場[19]は“成人期中期は上り坂が下りに転ずる時期で、（中略）、思いのほか危険をはらんだ時期です。成人期前期の発達課題をどの程度達成できたかで、中期にやってくる（かもしれない）危機にうまく対応できるかどうかが相当程度左右されることになります”と述べている。成人期中期のT学生は周囲からの役割期待関係の変化に対する葛藤や健康、体力に関わる不安に対してうまく克服していく力が求められると考える。一方、“関わりの中で成熟する”とし

て、山口[20]は“成人中期は、仕事・子育て・介護をする／しないといった選択が問われる世代であり、個人にとって「重要なこと」が明確になる時期である”と述べている。多くの役割負担を担うＴ学生は年代によってサポート環境が異なる可能性が明らかになった。しかし、そのなかで、「重要なこと」の一つである就学継続をする／しないといった選択が問われる場合の葛藤はどのようなものであろうか。質問紙法による量的研究では限界があり、質的研究でどのようなものかを詳細に検討が必要であると考える。また、有意差の見られなかった多くの項目は、Ｔ学生の共通した傾向であることを認識し、教員はＴ学生の学生生活状況について年代の特徴を理解して、学習支援の対応の一助にする必要がある。

Ⅵ　結論

学生生活状況の特徴では２群の間でほとんど差がみられなかった。ただし、家族等の成員よりサポートを成人期前期は受けやすいが、成人期中期は受けにくいという点が示唆された。２年課程（通信制）看護学生では成人期前期と成人期中期にある生活状況の特徴を教員は理解し、学習支援の対応の一助とする必要がある。

謝辞

本研究の無記名自己記入式質問紙調査法の項目は、兵庫教育大学院　人間発達教育専攻　幼年教育・発達支援コース　教授　横川和章先生よりご提供いただいたデータを元に一部修正・加筆して使用させて頂きました。ここに感謝の意を表します。また、本研究調査に快くご協力くださった研究協力者の皆様に心より感謝致します。

引用文献

１）高宮洋子, 西出順子, 山岡紀子ほか. 短期大学看護師２年課程（通信制）への入学動機と入学後の学習継続に影響を与える要因の分析. 日本看護学教育学会誌. 2009, vol.19, p.121.

２）新村出編.『広辞苑』. 第五版, 岩波書店, 1997, p. 1480.

３）金川治美, 西出順子, 武ユカリほか.“2年課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討”. 授業終了時調査の自由記述からみた特性. 日本看護学会論文集.看護教育. 日本看護協会出版会, 2013, Vol.43, p.90 - 93.

４）中島幸江, 佐藤禮子. 看護師養成２年課程通信制で学ぶ准看護師の仕事と学びを両立させるための学習環境に関する研究. 日本看護学会論文集. 看護管理. 日本看護協会出版会, 2009, Vol.39, p. 93-95.

５）干場進.“成人期前期の発達課題”対人関係のカウンセリング、ゼフィルスの森 https://amemoryworthlivingforl. blogspot. com/2012/05/blog-post.html,（参照 2021.12.6）.

６）干場進.“成人期中期の発達課題”対人関係のカウンセリング、ゼフィルスの森 https://www.skycounselor.com/生涯発達課題/成人期中期の発達課題/,（参照 2021.12.6）.

７）服部祥子.“生涯人間発達論”人間への不快理解と愛情をはぐくむために. 第２版, 医学書院, 2011, p.144.

８）西出順子, 金川治美, 武ユカリほか. 入学前授業終了時調査からみる入学前の不安と年代別特性.　神戸常盤大学紀要. 2013,（6）, p.57-66.

９）松原渉. ２年課程（通信制）短期大学の看護学生におけるテキスト学習に臨む学習姿勢と入学後の生活変化との関連.神戸常盤大学紀要. 2021, vol.14, p.75-86.

10）高林知佳子.“女性看護師が抱く仕事と介護の両立への不安と職場に求める支援”家族を介護する役割の有無別にみた認識の違い. 新潟医学会雑誌. 2019, vol.133, p.293-303.

11）山口智子. 関わりの中で成熟する.“問いからは

じめる発達心理学”生涯にわたる育ちの心理学. 坂上裕子, 山口智子, 林創ほか. 有斐閣ストゥディア. 2014, p.171.

12）干場進（青い空の代表者）. 資料室（ライブラリー）：2. 対話の会分野“成人期中期の発達課題”リレーショナルリーダーシップ研究会. https://www.skycounselor.com/,（参照 2021.5.31）.

13）稲葉昭英. ソーシャル・サポートの理論モデル. 対人行動学研究シリーズ7, “人を支える心の科学”. 松井豊, 浦光博編. 誠信書房, 1998, p.154.

14）西出順子, 金川治美, 武ユカリほか. 前掲書7）.p.57-66.

15）西出順子, 金川治美, 武ユカリほか. 前掲書7）.p.57-66.

16）西田裕紀子. 成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに 関する研究. 教育心理学研究. 2000, 第48巻第4号, p.433-443.

17）下仲順子.“中年期の発達” 発達心理学入門Ⅱ 青年・成人・老人. 無藤隆, 高橋恵子,田島信元編. 東京大学出版会, 1996, p.105.

18）総務省.“年齢階層別ソーシャルネットワーキングサービスの利用状況”：令和2年通信利用動向調査. 総務省. 2021-06-18. https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/html/nd252120.html,（参照 2021.7.22）

19）干場進. 前揚書5). https://amemoryworthlivingforl.blogspot.com/2012/05/blog-post.html,（参照 2021.12.6）.

20）山口智子. 前揚書11）. p.171.